



同志社人物誌 (23)

松田道

中嶋静恵

番目。ちょうど明治五年、学制が發布されたので、翌六年には具合よく新しくできた小学校にはいった。

「丹後ちりめん——西陣」を通じて京都市とは距離が心理的に近かったためか、時の知事槇村のPRによってか、道は小学校を出るとすぐ父に連れられて、三日の旅の末、京都市に出て来て、土手町の女紅場（後の府立女学校）にはいった。まだランプがなくて、寄宿舎は行燈（あんどん）を幾十となく灯していたという。

十七年に初等科を卒業すると同志社女学校にやって来た。この時代に、道は「デビス、ゴルドン、ラルネデ、森田久万人などの厳とした焦燥なき人格から感化を受けた」と後に自ら記している。ところで、この一、二年の間に、道の心は少くとも重大な三つの事件に出遭っていると思われる。その一はいうまでもなくキリスト教に接したことであり、二は婦人民権家、岸田俊子を知ったことであり、その三は結婚問題にぶつかったことである。

父がすすめたその相手というのはドイツ留学から帰ったばかりの新進薬学者であった。しかし道は言下に「私は一生結婚はしません」と断わった。それこれがもとで、同志社女学

明治百年を通して、女子の高等教育者といわれる人はそうザラにあるものではない。しかもその一人を同志社の歴史が持つているということは、語り継がれるべきではないだろうか。

累伝

松田道は明治元年九月七日、京都府峯山で

校を退学して、岸田俊子のいる横浜フェリス和英女学校に走った。二十才。後に道はこう書いている。「私のフェリス在学期間、教師の中にはデュー先生、故中島俊子（岸田俊子）先生……あり、自分の学校は日本一であると思っておりました。」

二十五年に卒業すると、またどう思ってた同志社に帰り、文学部甲組に入学した。しかし今度もすぐ中退せざるを得ないことになった。というのは、津田梅子の提唱した第一回米国留学生候補者募集に応じて、その厳しい学力試験に、群を抜いてただ一人パスし、留学することになったからである。二十五才であった。

はじめ、ペンシルバニア州ジャーマンタウンにあるミス、メリー、E、スチブンス学校に入り、二年後、プリンモアにあるプリンモア大学に入学した。ここで道は親友を得ることになる。土倉政子といい、その父は大和の富豪土倉庄三郎であって、新島襄のよい後援者であった。政子は既に三年前からプリンモアに学んでいたで、一年間だけでも学ぶことができた。道はプリンモアで経済学と政治学を取り、その成績は優秀であったと記録

にある。四年の勉学の末、B・Aをとって帰国すると、すぐ、神戸女学院教師に就任、それから五年後に、同志社女学校に招かれて来た。三十六才。それから約三十年間を道は同志社に奉仕することになる。その間に道は再度留学（四十才）、プリンモアでまた経済学を一年、英文学を一年、コロンビアで社会学を一年勉強し、その間、大使夫人となっていた親友政子の招待で欧洲旅行をしている。

大正十一年一月、道は中瀬占六郎と交代して、女学校（専門学部・普通学部）の校長になった。五十四才。この時代には女子部構内には静和館、ゼームス館、家政館が建ち、寮も増築されるなど外観も整い、教授陣も有名な学者がきら星のように名を連ね、女子部は花盛りであったといえる。

大正十三年十月に、時の皇后が京都行啓のついでに同志社女学校に立寄られた事件は、それから日本が全体主義の道を歩み、キリスト教を圧迫した十年後に、その行啓記念碑を建てた意味を考える時、それが道の校長時代の一つの重大事件であったことに思い至る。（その碑は今もそのまま栄光館前に残っている。）

昭和二年の静和館内部の火災も道には痛い事件であった。その翌年の有終館の火災は道とは直接の関係はないが、それに伴う海老名の総長辞任、大工原の就任が道にある種の圧力を与えたのはたしかであろう。時代の影響で学生数が減少しはじめた。そんな悪い時、女学校専門部が専門学校になり、道は専門学校長になった。ところが、その翌年が満州事変、その次の七年には本部から女専改革案が出され、八年にはあつてなく退職になった。

満洲事変と女専改革案、退職の三事件は別別の事件とは思われないので、強いて並べて書いておく。六十五才。停年退職といわれている。

それから宮津に居を構えた道は、役のある間は理事会に、同窓会役員会に、フェリス、神戸、梅光各学園理事会につとめて出かけて行った。その後、中国に行ったり、帰国して同窓会館にいたり、再び宮津に行ったり、最後に生れ故郷の峯山に帰り、昭和三十一年一月十五日、老衰で亡くなるまで、道は全く同窓会と同窓生に物心ともに支えられて、信仰による感謝の生活を送ったのであった。

道は英文学を和訳する時に、決して Love

を恋といわなかったという。清浄無垢。満十八才の道は恋知らぬおとめ心のままで、天上にあげられたのであろうか。

教育者

まっ白な衿、まっ白なたび、まっ白なハンカチ、決して崩れない姿勢。これが道という人物をよくも象徴している。明治の卒業生は道を清浄潔白な先生といい、大正、昭和の卒業生はそれに加えて……すぎて冷い……すぎて女を感じないという。どちらもその時代に立つ限りにおいて当っている。道自身は透明という言葉をよく使う。これには一抹の不明も一点の不義も払いのけずにはおかぬ厳しさがある。

同志社に来て二年目、時の校長Nが「舎監たる者は妻たり母たるの資格を有したる者ならざるべからず」という表向きに裏むきかわからぬ不明理由で一人のミスの舎監を解職させた時、新島寮の舎監を兼ねていた道は、デントンやほかの女教師とともにそれに抗議して辞職を願い出、寮生はまたN校長とW教頭をつるしあげたという事件が起った。

道はミスであるところを清浄であると自らを誇りとし、学生はミスの先生であればこそ、

新しい女として尊敬していたにちがいない。

校長になってからのことである。大学S学部のある先生が、娘が女専の入試に落ちて、何とかならぬかと頼みに来た時、道は眉一つ動かさずにいった。「落ちたのは娘さんの努力が足りなかったからです。この一年よく勉強して来年もう一度受けたいでしょう。」それだけで、前言も後言もない。当然のこととはいえ、傍らにいた人は自分の心の方が冷える思いであつたという。

道は「現代教育の目的」という小文の中でこういつている。「現代の教育は人を作るにあり。自発的精神を持った創造の精神に富んだ人を作るにあり……自分の思いついたことは敗れようが失敗を重ねようが専心やり通し、やり通し、行動の静止は目的貫徹の時に於であるのみである……。」とかく、女だからまあまあということは今でもある。道にとっては男も女もない。学問は学問、正は正、邪は邪であつた。

*

道のすばらしい教授ぶりについては定評がある。英文学はもちろん、数学でも心理学でも歴史でも、すべてよく準備されて無駄がな

く息もつがせない。そしておもしろい。きちんと時間に来て、きちんと時間に出て行く。

その英語のリーディングは朗々として本場仕込である。道を慕って神戸女学院から同志社に転校して来た小泉千代はこういう。「厳しかった。しかしその裏に私たちは先生の温い恩愛を感じた。人間誰しも同じ天分、能力を与えられていない。たとえば幾何のテストにFを取る人も時々あつた。先生は秘かにその不明の点をくり返し説明され再テストされる。それでもまだだめな時にはまた三度テストされ漸くメリットを与えられた。落第生を出すのは教師の恥である。授業を通して師弟は相知り相近づき、信頼を増すにつれて人格にひかれていくのは当然である。」

昭和のはじめ、年令すでに六十を越えた道からエッセイを習った人はまた、このようなことをいう。「大部分の男性の先生方が私どもを甘やかし、ガヤガヤとおしやべりに賑う一時間の教室を、ご自分のレクリエーションの場とでも心得ておられたかのような中で、………全神経を耳と頭に集中して過した緊張した一時間の味は今でも忘れられない。」

この中で男性の先生方というのは他大学か

ら招いた講師を指していると思われるが、この先生方が、キリスト教主義というものを単なる自由主義とはき違えていたのではないだろうか、とか、女子を人間として教育する（成瀬仁蔵）気持ちが無かったのだろうか、と批判し去ることはできない。もし批判するとすれば、同志社自身が明治、大正、昭和と歩いて行く中で、ピューリタンの厳しさを追々腹中にしまいこみ、その代りに小市民的な寛容や善意、温順を自由の風とともに吸いこんで来たところをこそ問題にするべきである。そしてそれが良いとか悪いとか簡単にいえることではない。

そんな中であつて、道ひとりとは、その髪型を三十年間、いや死ぬまで変えなかったように、その姿勢を変えなかったのではなからうか。——今も僅かではあるが道の流儀を踏みつけている教授はあるようである。そして今の学生はそれを嫌がつてはいない。

*

道はいつも大きな夢を持っていたし、実現できることには手をつけてみた。校長になるとこういうことをしてみた。

定例教授会を月一度は会食しながらするこ

とにし、その場に専門部上級生を各クラスから週番一名ずつ計三名、べんとう持ちで出席させ、傍聴させたのである。民主主義を実行しようとしたわけであらう。しかし、ここまで持つて来る過程はあるいは道の直言直行主義で非民主的であつたかもしれない。そこで学生はそれを喜んだかという、その反対で、教授会での道のキビキビした発言はむしろ学生の心をおのかせ、べんとうもろくにとに通らなかつたらしい。今の学生なら勇躍して参加しただらう。道の考えは一步も二歩も先に進んでいたといえるかもしれない。

*

大正十三年、米国会を排日移民法案が通過したと聞いた時の道とデントンの言い分を較べてみるとおもしろい。

道の頭にすぐひらめいたのは日本の公娼制度、道はそれを恥じ、「……外国で日本人の群集する町に於てのだらしな態度は根底においてこの公娼制度を遠く外国にまでもさらけ出して恬として恥じないという昔風の情性が悪影響を及ぼしているのだと思う……」と、むしろ米国がこういう日本を排斥するのが当然だという風にいい、デントンは、白人

が人種的偏見に基づいて、この法を制定したことは遺憾であるとし、この法が撤廃されるまでは祖国の土を踏まないといった。同じく熱心なキリスト者であるが、道の方はその純潔精神から発想し、デントンの方はその平等精神から発想したものと思われる。

ここでデントンについて書くことはできないが、この二人は最後までお互いに尊敬しい、助けあい、同志社女子部の精神構造の捨て石になっていることは否めない事実である。

もつといろいろと書きたいが許されない。しかし、さきにあげた小泉千代の明治調の一文をそのまま載せさせていただく。実によく道の人物があらわれている。

「寡黙にして阿諛追従を嫌い学問に没頭し自然を愛し文学美術を好み、神を懼れ清浄潔白人格者を崇拜し、直言直行、時に誤解を受け激怒することあるも、いつまでも拘泥せず超越達観し、幼児の如く無邪気に明朗に自己の欠点弱点を辨えて内省し、母君に孝養を尽し人を愛し些細の親切にも感激せらるる人間味豊かな先生がひたすら理想に精進し天職に忠実に事毎に天祐を祈らるるお姿を敬慕せ

ずにはおられなかった。このような先生が信奉される宗教なればと私の頑固な心もいつしかキリストに向けられていた……。」

晩年と同窓会

道という人は後々のために貯金をしておいたという人ではない。それに当時の同志社の退職金はおそらくひどく僅かであったにちがいない。退職後、宮津にひきあげると、道の生活はすぐ苦しくなったと思う。しかしそんなことを他人に洩らす道ではない。血つづきの甥や姪はかねがねそのことについて相手がえらい人であるだけに深い思いやりを持っていた。そういう意味もあって、退職後六年目に、天津にいる甥は、自分のしている日本語学校を手伝ってもらおうという名目で道を中国に呼んだのであるが、それもつかの間で、昭和十九年には道は甥の迷惑を考えると、戦争末期の混乱の中にある祖国に帰らざるを得なかった。この時から道と同窓会との直接的な関係が生れる。

めたのであるが、同窓会は道のために何くれとなく気を配って不自由な思いはさせなかった。終戦後、道は女学校の聖書の授業を少しだけ受けて、小遣いを得ていたが、そういう八十才の道を見るにたえぬ同窓会は道に宮津行きをすすめ、宮津の姪のところには食費を送り、道にも毎月いくらかの小遣いを送ったのである。その姪は今、こういつている。「さすがに宗教の学校であるからでしょうが、とても人情が厚く、そのあまりの真心の美しさには思わず胸を熱うしました。」

生きている間中、同窓生わけでも明治の卒業生は道に便りを書きつづけた。一日五通ほどいたという。今でもわざわざ釜山まで墓参に行く同窓生のグループがある。全く美談といえば美談である。しかしそれは道が、それだけのことを生きている間、して来たということの証明ではないだろうか。

*

道は卓越した学者であったのに一冊の著書ものこしていない。また社会性も政治性も原的に充分ありながら、どんな婦人運動にも自ら進んで参加していない。道の名が日本女性史の中に一行も書かれていないのはそのた

めだと思う。しかしそれがまた道という人を特徴づけているのである。

道の机の上は乱れていたことがなかった。その日のうちにその日の仕事を必ず片づけたのである。しかも校長になってからは昼食後はどんなことがあっても一時間の昼寝をしたという合理主義者、健康第一主義者であったから、徹夜して原稿を書くということは考えられなかったにちがいない。与えられたことを時間内に、最大限に忠実に果す。自分を決して誇示しない。それが松田道流というものではなかっただろうか。そしてそれは最終的には道流の清浄な信仰——信仰による清浄性から来たものであると思う。

(昭2女晋卒・女子大事務主事)